

朝起きて、出かける前に服を選ぶ。その日の天気や気温、会う人、出かける場所などの情報を脳内に総動員してコーディネートを決める。あらためて思い返すと結構ストレスフルな作業だ。それでも、その日の気持ちにピタッと合ったものを選べるとそれだけで気分がよかつたりする。選ぶときの決め手は直感的な「ときめき」だろうか。逆に「ときめかない」のが捨てるときの基準だというのは、今をときめく『こんまり』こと近藤麻理恵さんの片づけ整理法だ。

ちなみに、人が物を捨てられない理由は、過去への執着（残しておきたい）と未来への不安（いつか使うかも）のこと。まさに「今」と徹底的に向き合う仏道修行しながらの卓越したコンセプトだ。しかし、私自身それがどうにもうまくできない。不思議なもので、同じクローゼット内を眺めているのに、どれも良さそうに見えて悩む日もあれば、気分に合う服がひとつもないと思う日もあつたりする。自分の判断力なんて頼りなくてことん信用ならないわけだ。

実は案外一番うれしいのは、しばらくタンスのこやしになつてい

た服が、ある日ふいにすくいあげられ、「まだ着られるかもしれないぞ」と日常着のローテーションに復活することだつたりする。

なぜうれしいのか。個人的には、過去の自分のチョイスを今の自分が褒めてくれているようなもので、過去と現在の自分が変わらず

工藤量導

変われないということに
いつでも不安になつて
今ここにあるものを憎んでしまうの
あなたのことさえも

（ヤン・フレンジー「ロンロンデイズ」より）

ゆき風

微

風

吹

動

微風吹動

つながっていることを確認して少し安心するからなのだと思う。とは言いつつ、本音は片づけがうまくできないことの言い訳と片づけ上手への小さな抵抗の気持ちだつたりするのかもしれない。

結婚する前、よく小さなライブハウスへ足を運んだ。冒頭に紹介したのはその頃に出逢ったアーティストの楽曲だ。たしかOLをしながら、時間を見つけて音楽活動を続けていると言っていた。

誰もが一度は若かりし頃に「変わりたい」と思い悩んだことがあるはずだ。でもそなはうまく変われない。「自分探し」というのも、実のところ現在の不満足な自分を捨て去つてチエンジしたいという切実な思いのあらわれだろう。片づけブームも、そんな変わりたい願望とどこか同調する部分があるよう思う。

さて、ライブにかけたのは、僧籍を取つて数年をへた頃だつた。出家という以上、もつと何か変わらなければならないのではないか、周囲の期待にしつかり応えられているのか、という漠然とした不安と焦燥感に駆られていた。整理しきれず、うまく片づかない暗澹たる思いを内心に抱えて、演奏の出だしをぼんやりと聴いていた。

ところが、である。歌詞の最終節にはからずも心がときめいた。

変わらないということは 奇跡ということ

そんな風に思えれば変わつていけるよ

変わり行く中で どこまでいけるのだろう?

分からぬけれどもう迷つたつて良いや

私をつないでゆく

少し視点を転じれば、過去からの蓄積としがらみでがんじがらめに固められたポンコツのような自分のあり様も「奇跡」と呼ぶことができるのだ。「変わりたい」という憧れへの執われに、どうにか折り合いをつけ、迷いながらも踏み出す一步を見出したところに、法然上人の教える立脚点があるのでないか。そう思った。

凡夫（愚者）の自覚とは「変われない」、つまり過去への執着と将来への不安の真つただ中にあることの自覚と許容からリスタートし、そんなポンコツたちが生きる意味を問い合わせ、逆襲の狼煙をあげるべく「変わらない」覚悟で握り突き上げた両拳を、そつとなで下して開き手合わせる瞬間なのかもしれない。若かりし自分が少しロックな気持ちで感じたことだ。ちょっと大げさかもしないが。

今ならあの頃の自分にどんな風に声をかけてあげられるだろうか。変われない、そして変わらない私たちのものがきをもれなく「奇跡」として見届けてくれる不变のまなざしの在り処を、あなたはすでに知つている。きっと私の眼にうつる私たち一人ひとりの命は、ときめきの魔法に満ち溢れたかけがえのない存在に違いないのだ、と。